

米

ソニー・ピクチャーズエンタテインメントは昨年6月、北朝鮮の金正恩第

1書記の暗殺を題材にしたコメディ映画「ザ・インタビュ」の予告編を公開した。すると北朝鮮は、「最高指導者の尊厳を傷つけようとしている」「絶対に許せない」などと反発。北朝鮮側は否定するものの、米当局によれば、同社に対してサイバー攻撃を仕掛けたとされる。上映が決定されると、北朝鮮国家安全保障部（秘密警察）などは「何があっても作品が流入しないようにしろ」と大規模な取り締まりを始めている。

しかし、コメディという意味では、北朝鮮が『労働新聞』や『朝鮮中央テレビ』などを通じて発信する金正恩氏の姿のほうがかっこいいなことがある。それは意図的なものなのか。それとも、ミスなのか。もし国内から発信されるこっけいな映像や写真が意図的に発信されているのだとすれば、北朝鮮がこの映画に対して反発した理由が金正恩氏の尊厳を守るためということではなくなるかもしれない。

さびた潜水艦

まず金正恩氏の映像や写真を検証してみよう。

金正恩氏の映像は、北朝鮮の通信

社のホームページを通じて世界に発信される。もちろん、金正恩氏を誹謗中傷するのが目的ではない。国民や外国人に対してその尊厳を高めるために発信しているのだ。

例えば、昨年6月に朝鮮労働党機関紙『労働新聞』が報じた潜水艦に乗船する姿を見てほしい。

金正恩氏が昨年6月、海軍を視察に訪れた時のものだ。乗船したのは「ロメオ級」と呼ばれる旧ソ連製の潜水艦で、艦齢三十数年以上は経過していると思われる。旧ソ連では崩壊以前にすでにスクラップにされたものである。

潜水艦は通常、隠密裏に作戦行動を遂行するため、海面よりも暗い色に塗装することが多く、この艦のように明るい緑色にすることは、通常の軍隊であれば、現役運航中の潜水艦にはあり得ないさびが至るところで見受けられる。金正恩氏が乗艦するためだからだろう。手すりや付けられていたり、コースを見誤らないようにするため監視窓が取り外されていたりする。潜水すれば浸水するのは自明だ。

金正恩氏が少しでも軍事知識を持つているならこうした点について「お怒り」になったはずだ。潜水艦は、本来、普段から最高レベルの練度を維持しておく必要があるからだ。

金正恩氏の「こっけいな姿」 発信の背後に反体制派の思惑

北朝鮮の最高指導者、金正恩第1書記のこっけいな写真や映像が国営メディアに登場するようになった。その背景に、政権内の権力闘争が影響している可能性がある。

にしむら きんいち
西村 金一
(軍事・情報戦略研究所長)

朝鮮中央テレビは2012年に金正恩氏が戦車に乗る姿を映し出した。「自分の（南北）統一観」は武力統一であり、（それを実行に移す時には）直接戦車でソウルに進軍する」と勇ましく強調する金正恩氏の姿を宣伝する狙いだ。

しかし、よく見ると、金氏が乗っていたのは、偵察部隊が使う小型の軽戦車だった。金氏は大将として戦車軍団を率いる立場にある。威厳を発揚するためなら、本来、もっと見栄えのする大型で最新鋭の戦車に搭乘するはずだ。北朝鮮はそういう戦車も持っている。大柄な金氏が軽戦車に搭乘する姿はアンバランスな印象を与え、「本当は小隊長にすぎない」と暗示しているかのようだ。

上下逆さの双眼鏡

朝鮮中央テレビは11年にも、金正恩氏が双眼鏡を上下逆さまに持つ姿を放映した。映像は金氏が10年に大将の称号を与えられたことをたたえたもので、金日成軍事総合大学を卒業し、軍事経験が豊富で父である金正日氏の後継者にふさわしい人物であることを宣伝する狙いで作られたものだ。にもかかわらず、そんな「お笑い」のようなひとコマが挿入されていたのである。

これだけではない。ほかに、遊



潜水艦にはあり得ないさびが……

Reuters

園地を視察した金氏がアトラクションの乗り物に乗って必要以上にはしゃぐ姿、本人の発した声が流されない「クチパク」映像、体重を支えきれずに両足首を痛めつえをついて歩く姿……など。そんな映像や写真をわざわざ流す必要があるだろうか。

こうした映像や写真は、当然、多くの関係者の検閲をパスして選ばれた結果、放映されたり掲載されたりしたものだ。であるなら、誤って掲載したり放映したりされたものではなく、何らかの意図があると勘ぐってしまう。

金日成主席や金正日総書記の時代

には、そんな映像や写真を目にした記憶がない。金正恩氏が最高指導者の座に就いてから多く見かけるようになった。

暗殺計画も

金正恩氏は12年4月に党第1書記に就任して以来、困窮・疲弊した経済を立て直せないでいる。国民は長年、食事さえも満足に口に入れることができていない。

14年5月には、金氏主導で大規模な住宅建設事業が進められてきた平壤市内で高層住宅が崩壊。多数の死亡者が出たと朝鮮中央通信が伝えた。建設責任者は「手抜き工事」を責められ処刑されている。

外交関係も悪化している。中国は、核開発や弾道ミサイルの発射実験などの軍事的恫喝、北朝鮮とのパイプ役とされた張成沢・国防委員会副委員長の処刑といった一連の強硬姿勢に対して依然、不快感を示している。中国の軍事戦略家王翔氏も、北朝鮮について「立ち遅れた王朝政治を改

革しなければ長期の存立は難しい」と指摘する。

北朝鮮もこうした態度を取る中国への反発を強めており、朝鮮人民軍の軍官学校などには「中国は裏切り者であり、我々の敵」と書かれた額を掲示するまで両国の間にはすさまじい風が吹き始めているのである。

後ろ盾だった中国からも見放され、統治体制に対する不平や不満が国民や政権内部に蓄積されている。

こうした中、13年5月にはある女性警察官が「革命の首脳部を決死の覚悟で守った英雄」として称賛された。この女性が守った「英雄」とは金正恩氏であり、「決死の覚悟」をしてまで守らなければならなかったのは車両事故を装う暗殺計画が背後にあった可能性が指摘されている。

その半年後には、米ランド研究所が「北朝鮮では金正恩暗殺未遂事件が起き、その後警護が大幅に強化された」と報告。14年4月には中国「環球時報」が「北朝鮮が金正恩の暗殺に備えた訓練を大規模に行った」と報じた。

また、韓国「中央日報」は14年8月、金正恩氏の秘密統治資金を管理する朝鮮労働党「39号室」傘下の朝鮮大聖銀行のユン・テヒョン首席代表が秘密資金500万ドル(約6億円)を持ち逃げしたと報じた。

北朝鮮では、軍の人民武力部長や



本来は尊厳や威光を高める狙い

朝鮮中央通信=朝鮮通信

総参謀部長、警察の人民保安部長といった高級幹部が頻りに交代、あるいは左遷や粛清されている。軍幹部の交代は金正恩体制が安定化している証拠、と指摘する専門家もいるが、全体的に評価すると、体制が不安定化しているのしか思えない。

「ザ・インタビュー」の予告編が放映されたのは、そんな時期だった。北朝鮮が過剰とも思えるくらいに反発したのは、「最高指導者の尊厳を傷つけた」というよりも、金正恩氏暗殺の筋書きが体制の核心や機微に触れたためである。そして金正恩氏は、映画に描かれた暗殺のストーリーを見た国民の反応を恐れたのだ。

こっけいな映像や写真が意図的に流されているのだとすれば、その背景に、金正恩氏周辺でできなくさい動きが進行していることと表れと見ることもできるのではないか。